

刊夕 日八廿月九

佛のみ名を稱へよ

眞、繼、雲、山

無くて七癖あつて四十八
癖といふが、變ればかはる
くの癖があるもので、私
の宅の一雇人は在宅して既
に、六年になるが、ツイぞ
那様とも、奥様とも只一言
も口にしたことを聞かぬ。
これは新妻を迎へたときに
名前を呼び習はせなかつた
ら、一生オイコラで通すとい
ふ話であるが、大かたそ
の邊のコツであらう。

ところが最近、新たに一
少年を雇ひ入れしに、いつ
しか變人の先輩、むつつり
居士に見習ふたものか、こ
れ又私や妻の名を呼ばない
やうになつた。さういふこ
とに一切無頼着な私も、
さすがに名を呼ばぬ。家庭
が如何に淋しいものである。
うした體験は、四十年來
はじめての話である。名は
概念であつて、實の體では
ない。馬鹿と呼ぶ人も、
畜生といはるゝも、素と音
響の相違にして實體に何の
交渉のある筈はないが、閣
下といふ尊稱には呼ぶ人に
それだけの尊敬の意がある
から言葉として出るのである

常磐石日新聞

定價一部金貰銀一月金拾銀零分五厘
廣告料五錢十二字結行金五拾銀
發行金拾銀人印刷入川崎文治
發行所常磐毎日新聞社
印刷所常磐毎日印刷株式会社
日曜祭日の翌日休刊
電話六三〇番

る。あなたといひ、君とい
ひ、お前といひ、貴様とい
ふ、ひとしく相手を呼ぶ符
合ではあるが、その音聲の
響き工合によつて呼ぶ人の
胸に相手の位が上下するの
である。

先生と呼ぶ場合には、そ
れが先生として心に宿つて
ゐるのであり、お前と呼ぶ
場合にはお前の位において
彼が、その胸に宿つてゐ
る筈である。儀式的な國と
國との外交文書には、締盟
國の君主の名がたゞく同
じるほど、相手國に敬意を表
したことになるのだといふ
ことである。

觀無量壽經には『汝好持
陀佛といふ佛のみの名を聞
いて信心歡喜するものは救
はれるといふことである。

汝よくこの語をたもてとい
ふことは、南無阿彌陀佛の
み名をたもてといふことで
ある。阿彌陀經には『執持
名號一心不亂』と教へられ
てゐる。一心不亂に南無阿
彌陀佛のみ名を執持せよと
約すれば、要するに、南無
阿彌陀佛といふ佛のみ名を
稱へよといふことである。

斯く觀じ來れば、浩翰な
佛のみ名を稱へよ、たゞ
佛のみ名を稱へよ、そこに
深き本願の添けなさを體得
し得る。

〔完〕

の

のである。

人は即身にして成佛した所
一ぱいとなる。佛の姿が凡
夫心を占領するなら、その
人は即身にして成佛した所
溶け込んでしまふことであ
る。佛のみ名を稱へるその
人の心のなかは、佛の姿で
はないといふことである。

は、佛のみ名を稱へる所
ではないといふことである。

豊作豫想外る

昨今の天候災して

降雨續きに稻穂が倒伏

石城郡下の稻作は本月上旬頃迄は順調なる天候の爲め三四割增收確實と豫想され農家を喜ばして居たが其後の天候は降雨續きで溫度も例年より稍低く殊に最近は稻穂の降雨倒伏されるものが續出して居る爲め豊作の豫想は幾分裏切られて平年より稍良好の程度であると

對坑競技の 繼續走組合せ

既報來る十月二日午前九時より磐中グランドに於て開催される石城郡第三區各小学校對抗陸上競技大會勝敗の分岐点たる各繼走の組合せは左の如く決定された

△四百米リレー（五年男）

A組 平第一 内郷三

内郷二 内郷高（同B組）

平三 小川 赤井二 好

間高（同C組）平達 内郷一 飯野 赤井一（五年

女A組）好間高 内郷尋

平三 内郷三（同B組）小

川 平二 内郷二 赤井二（同C組）内郷一 赤井一 飯野 好尋

一 飯野 赤井一（五年

女A組）好間高 内郷尋

平三 内郷三（同B組）小

川 平二 内郷二 赤井二（同C組）内郷一 赤井一 飯野 好尋

一 飯野 好尋 平達

赤井二 内高（同B組）好高

約の制定に就き協議せる結果會長副會長を左記の如く

共濟委員聯合會

正副會長を決定

選任した

△會長山崎清三△副會長

本日本署に開いた同署管

磐城高等女學校に於て來月

十七日開催される秋季大運

（平第三校）高野弘子 荒

木トキ 今田操 鈴木ひ

千代子

木炭検査の縣移管は實現確

實とされて居るが是れが實

施された場合には濱三郡木

炭同業組合の財源であつた

能となる等種々不便宜な点

ふ事となり一方縣營検査と

なると検査が厳格でストッ

ク品過多となり移出業者は

困難に陥り且つ検査料の納

附等も組合なれば延期も出

来るが縣營となつては不可

来場五十二圓十錢と云ふ本宮に次ぐ高値を誇つて居る

が更らに昨廿七日には白繭六百貫、最高五十八

圓二十錢、最低四十五十錢、馴五十二圓六十錢と

云ふ騰貴振りを示し六十圓臺間近の氣配を示して居る

昨日の四倉市況

昨報四倉織市場の晚秋蠶取引相場は廿六日に馴相

場五十二圓十錢と云ふ本宮に次ぐ高値を誇つて居る

たが更らに昨廿七日には白繭六百貫、最高五十八

圓二十錢、最低四十五十錢、馴五十二圓六十錢と

云ふ騰貴振りを示し六十圓臺間近の氣配を示して居る

六十圓間近の氣配

繭値また飛躍

磐女生の虫歯

殆んど大半

磐城高等女學校にては一昨

二十六日以來全校生の第二

回口腔検査を行つたが虫歯

患者は全校生七百六十四名

の内六百五十五名に達し第

一回と大差がないと因に學

年別左記の如くである

（二年）一七〇（二年）一六

（五年）一五九（四年）一六

（六年）一五八（三年）一六

（七年）一五七（二年）一六

（八年）一五六（一年）一六

（九年）一五五（一年）一六

（十年）一五四（一年）一六

（十一）一四五（一年）一六

（十二）一四五（一年）一六

（十三）一四五（一年）一六

（十四）一四五（一年）一六

（十五）一四五（一年）一六

（十六）一四五（一年）一六

（十七）一四五（一年）一六

（十八）一四五（一年）一六

（十九）一四五（一年）一六

（二十）一四五（一年）一六

（二十一）一四五（一年）一六

（二十二）一四五（一年）一六

（二十三）一四五（一年）一六

（二十四）一四五（一年）一六

（二十五）一四五（一年）一六

（二十六）一四五（一年）一六

（二十七）一四五（一年）一六

（二十八）一四五（一年）一六

（二十九）一四五（一年）一六

（三十）一四五（一年）一六

（三十一）一四五（一年）一六

（三十二）一四五（一年）一六

（三十三）一四五（一年）一六

（三十四）一四五（一年）一六

（三十五）一四五（一年）一六

（三十六）一四五（一年）一六

（三十七）一四五（一年）一六

（三十八）一四五（一年）一六

（三十九）一四五（一年）一六

（四十）一四五（一年）一六

（四十一）一四五（一年）一六

（四十二）一四五（一年）一六

（四十三）一四五（一年）一六

（四十四）一四五（一年）一六

（四十五）一四五（一年）一六

（四十六）一四五（一年）一六

（四十七）一四五（一年）一六

（四十八）一四五（一年）一六

（四十九）一四五（一年）一六

（五十）一四五（一年）一六

（五十一）一四五（一年）一六

（五十二）一四五（一年）一六

（五十三）一四五（一年）一六

（五十四）一四五（一年）一六

（五十五）一四五（一年）一六

（五十六）一四五（一年）一六

（五十七）一四五（一年）一六

（五十八）一四五（一年）一六

（五十九）一四五（一年）一六

（六十）一四五（一年）一六

（六十一）一四五（一年）一六

（六十二）一四五（一年）一六

（六十三）一四五（一年）一六

（六十四）一四五（一年）一六

（六十五）一四五（一年）一六

（六十六）一四五（一年）一六

（六十七）一四五（一年）一六

（六十八）一四五（一年）一六

（六十九）一四五（一年）一六

（七十）一四五（一年）一六

（七十一）一四五（一年）一六

（七十二）一四五（一年）一六

（七十三）一四五（一年）一六

（七十四）一四五（一年）一六

（七十五）一四五（一年）一六

（七十六）一四五（一年）一六

（七十七）一四五（一年）一六

（七十八）一四五（一年）一六

（七十九）一四五（一年）一六

（八十）一四五（一年）一六

（八十一）一四五（一年）一六

（八十二）一四五（一年）一六

（八十三）一四五（一年）一六

（八十四）一四五（一年）一六

（八十五）一四五（一年）一六

（八十六）一四五（一年）一六

（八十七）一四五（一年）一六

（八十八）一四五（一年）一六

（八十九）一四五（一年）一六

（九十）一四五（一年）一六

（九十一）一四五（一年）一六

（九十二）一四五（一年）一六

（九十三）一四五（一年）一六

（九十四）一四五（一年）一六

（九十五）一四五（一年）一六

（九十六）一四五（一年）一六

（九十七）一四五（一年）一六

（九十八）一四五（一年）一六

（九十九）一四五（一年）

した者は上杉の藩士三人、其内二人は父の爲に重傷を負ひ遂に落命いたし逃げ去りました、長谷部傳藏と申す者は今以つて存命いたし居ることゝ存じます、然しその長谷部は悪人ではござりますが、剣術には達しましたとの事、それ故先生より

周々うるそめにて其詩が指
者の許へ住込みし事情が明
瞭いたした承るに主計どの
は昨年横死なされし由、そ
の鬱憤を晴らす爲に剣道を
學ばんとして拙者方へ參つ
たナ』

翻「わたくしは東横の横町
に道場を開き居りました里
見主計の娘にござります」
それを聞いて周作先生が
周『里見どのの、息女か』
と云つたが

静『わたくしには望みがござります』
周『その望みはどういふ事か、これにて申せ』
再度問はれて

周作お靜は千葉周作先生に同情

【禁轉載上演反映畫】



前二回は絶類ではござりませぬ、父は東條先生より経學の御指導を受けまして師弟の因みあるより一時わたくしは先生の許に參りて居

に依つて當家に其許は參つたが一堂先生の御親父主計どのとは親族であるか』

A black and white woodblock-style illustration depicting a scene from a Japanese narrative. On the left, a man is seen from behind, wearing a patterned robe with a circular emblem on the shoulder. He is kneeling on the floor. Opposite him, a woman in a traditional kimono is also kneeling, looking down towards him. Between them stands a vertical object, possibly a brush or a stick, which has three circular marks on its upper part. The background is minimal, suggesting an indoor setting.

の技を會得いたしましたの
ち傳藏の行方を探ねて討取
り父の怨みを晴らしたく存
じます』

周『それは——今の世には
珍しき其許は孝女次ぎに尋
ねるが東條一堂先生の周旋

道軒圓玉演
藤紫雲盡
客里見靜枝

りましてござります、それ
に亡父執り立ての門人山路
金作と申す者は番町の齊藤
彌九郎先生の僕となり是
劍術を學び、わたくしに跡
勢をいたして望みを遂げ
せる事申し居ります

の門弟にては屈指の人物、
中にも平手は最も優れて居
る、然し書生は克、文之、

共へお泊り下さいました時に秋山先生にお會ひになると

ない、門弟共の茶受けに致す、時に主人、何ぞ田舎に變つた事があるか』

小『イエ、先生に用事があつて参つた譯では御座いません、浅草の出店まで参りましたその序にお尋ね申しますがござります、これはつまりの物で御座いますが御覽に入れます』

『これは小松屋珍しいナ
の小松屋といふ旅宿の主人
小先生御無沙汰を致しました』

今何處に居るかそれが知れぬ、道場には諸方から門弟も来るから、その人々に聞うたが知つてゐる者も無いスルと其年の五月の事、千

一心になつて學べば女たりとも武藝の極意を得ることも出来る、千葉先生はもう是程出来れば敵を討つことも出来るであらうと思つた

とも容赦はいたさぬ、ところが靜枝も一生懸命それゆゑ進歩も早い、その年も過ぎ翌年の春を迎へたが靜枝はもう目線以上、免許と申

共へお泊り下さいました時
に秋山先生にお會ひになると

外科婦人院坂井

正確下體品、真大藥房

木村柳花病科外專門院

小一へ三一さうで御座りますか、秋山先生も今は御氣でお困りなすつてお在りさいます』と何氣なく申した。

吉田眼科病院

東京り商店
出張所旅館會津館
平驛前(元平劇場跡)
電話六四八番
御一報次第社員參上有利に御
相談も致します。